

津田昇平教話 第七八話

令和三年三月十九日 朝の教話

木のもとへ肥をやれば、枝振りまで栄える。

ご先祖や親を大切にすれば繁盛させてくださる。

おはようございます。令和三年三月十九日の朝をお迎えさせて頂きました。

今日は、明日の霊祭れいさいの前日ということと、また、どういう心で御霊祭ごれいさいをお迎えするのが相応ふさわしいのかということについて、ここまでお話をしておりましたところを土台にしながら、振り返りながら、大事なところを抑えて、明日の御霊様みたまのお祭りに、共々に良い準備をして、お祭りをお迎えさせて頂きたいものやと思います。

教祖様の教えに、高橋富枝たかはしとみえの伝えというところがございまして、
六条院教会の高橋富枝先生という女性の先生でいらっしやいますけれ

ども、富枝先生、まあ金照明神こんしょうめいじんっていう御神号ごじんこうも頂かれておられまし
たけれども、この金照明神様のお伝えの中の一節で、こちらにも有名なこ
理解ですので、これを機に知っておいてもらったらよいかと思うんで
すけれども、

木のもとへ肥ひをやれば、枝振りえだぶりまで栄はえる。

ご先祖や親を大切にすれば繁盛はんじょうさせてくださる。

一理Ⅱ 高橋富枝たかはしとみえ 三三一

こういうみ教えがあるんですね。「木のもとへ」、一本の木があったと

して、その木の根元ですね。それをまあ、「木のもとへ」、「根元へ。」「肥ひ」、肥料の肥ですね。「肥をやれば」、「肥料をまけば」、「枝振りまで栄える」。「栄養がしっかりと届きますので、根っこから吸収をして、ですんで、木も非常に栄養たっぷりで育っていきますので、枝振りも良くなっていくというふうですね。まあ葉も茂るといふことになるんでしょう。

これと同じように、「ご先祖や親を大切にすれば、神様が繁盛させてくださる。繁盛させる」といふのは、ま、いろんな「繁盛」といふふうな言い方でも、何もこうお商売のことだけを言ってるわけでもありませんし、おかげと言いましても、いろんなおかげがあるわけですけども、繁盛させて下さるといふのは、いろんなところで神様のお徳が現れて、神様

のおかげを蒙^{まう}るじじができぬじじ、ま、そじじじじすね。

じゃあここで、親先祖を大切にするとじじじとはどうじじじじか、ってなってきましたね。親というのは生きてます。まあ年齢にもよりますけれども、亡くなっておられる方もおられますけれども、場合によったら、親は生きている、じじ先祖は亡くなってるじじじじじじじじじじになりますね。

でも、これまでのお話をさしてもらいながらも、教祖様の中で、あるいは日本人の古来からの信仰という部分において、生きているこの世界と、あの世の世界ですね。この、見える世界と見えない世界というのは、垣根^{かきね}というのは非常に低いものですから、肉体という服を脱いだ人が死者であって、たましいはずっと生きています。で、生きている人間と

いうのは、生者せいじやというのは、肉体という服も持っているという。でも、御霊みたまは生きている。じゃ、違いはというと、肉体という服があるかないかということに、基本的には限られるんですよ。

で、生きている人間は、この天地の間で生きてるわけですけども、目に見えるところで言うたら、この地の世界で生きてますね。亡くなつた方の御霊様というのは、天で生きておられますけれども、この天と地というのは溶け合ってる状態なんです、何もこう、別々になつてるといふふうな世界観ではありません。

目に見えるところでは、ちょっとこう次元が違いますから、捉えとらにくいという意味においては、隔へだたりはあるんですけども、本当において

は、あらゆるものの中に、天は溶け込んでおります。だからまあ、私も喋る^{しゃべ}ことができています。私の、という小天地^{こてんち}がありましても、私の中に天があるから、だから話すことができるわけですね。皆さんも、天の部分が^{ぶん}あるわけで、天と地で成り立っている。生きとし生けるものもそうだし、万物^{ばんぶつ}もそうだし。

ま、そういう意味では、親先祖^{おやいそ}ってという言葉で一言にかけてますけど、まあ肉体^{じくたい}があろうがなかろうが、ということになってくるでしょうね。その御霊^{ごたま}が浮かばれるような、安心^{あんしん}されるような、そういうことが大切にするということになってくるんですね。

じゃあ、まあこう、人間^{にんげん}というのが、って言ってもいいと思うんです

よ。親であろうが、先祖だろうが、あるいは子だろうが、まあ、結局一緒なんです。「人間のたましいは」っていうふうな表現で言っても構わないですね。

親先祖を大切にするとというのは、結局は生きてる人間やら、死んだ人間やらも含めて、御霊というものを大切にしてあげると、そうするとおかげになってくる。ご先祖や親を大切にすることとは、要するところは、親先祖の御霊を大切にすることと、まあ変わらんですよね。これを、大事にするよ。

じゃあ、どうしたら大事にできるんか。いろんな大事な仕方はあるかもしれませんがけれども、基本的に言ったら、いつも思って、心にかけて、

まあ寂しくないようにしておくといいよ。

しておくって言ったら偉そうですけども、いつも関わり合いながら、お話ししながら、意識しながら、忘れないようにしながらというのが、一番大事なところになってきますね。

つねひいん 常日頃の、日々の暮らしの中でも、お参りをさせて頂いたり、あるいは家で拝ましてもらうんでもそうですし、そういう時にでも、神様にはぐれいご拝礼申し上げると同時に、御霊様にもあたまご挨拶をして頂く。これがすごく大事になってきます。

ま、何も難しいことはないです。「おはよう」言うたらいいんです。もう、それだけでいいですよ。生きてる人間でも、まあ家族でも、朝起きて

まだら、「おはよう」「へいへいと言いますわね。」おはよう「言いつ、」おや
み。「いれでいんですよ。特に大きな用事がなかったら、「あ、おはよ
う、で、で、後はめいめいのやるべきことをやってくかもしれないねえ。

子どもであれば、「おはよう」「言いつ、」今日な、学校であんなあるか
ら、いんなせんじらんかから、ちやうと早はかおわ「とか。ま、そねべ
らい喋えるかもしねませんね。御霊様もおんなじで、ま、別に喋えらんでも
いいっちゃ喋えらんでもいいですけよせ、「おはよう」で十分っちゃ十分
なんです。せよよ、「おはよう」「あ、今日はいつらいつらいつらと
てもおひつと遅おそいそと、べいべいに行かしてもいらいます」「つう
のど、い、挨拶をしてもいい。

ご挨拶したら、じゃあどうなるかっていうと、生きてる人間に言ったところで、生きてる人間が何とか、それですごくね、おかげを授けられる親である、そんな偉そうなことは言えないんですよね。だから亡くなった御霊様も、肉体という服がないだけのこと、基本的に何かできるわけじゃないんです。

ただ、生きてる人間でも、「ああそうか。ああ分かった、分かった」って、今日の様子が分かるだけでも安心ですよ。

子どもたちが学校から帰ってきて、「じゃあ、どこかに行ってくるわ。^{だれだれ}誰々ちゃんと遊ぶわ。何時ぐらいに帰ってくるわ」って言うのと、ああそうか、と思って、「じゃあ、夕方の五時半ね。ああ、じゃ、六時までには

帰ってくるんやね。あ、どこどこ公園で遊ぶんやね。誰々ちゃんと遊ぶんやね。うん、分かったよ。気をつけてね」で、済むんですよね。

でもこれ、帰ってきて、たまたま、どこか買い物に行ってた。お手洗い行ってた。で、ランドセルを置いてすぐにまた出てって。そしたら、親の方は心配しますね。学校から帰ってきた子どもが、「あれ、いつの間にか帰ってたんやろっか?」と思うし。場合によっては気付かなくてもいいし。で、「何時に帰ってくるのか。どこに行ったんか。よう分からん…」ってなりますね。

まあ何にしても、お話してるご、親として安心しますよね。だからといて、何かできめるとしてわけでもない。でもね、親として

ることは、まあ「気を付けて」って言うって、神様をお願いしてあげること
でしようかね。

亡くなった御霊様でも、お話をさしてもらったりしていると、何ができ
るというわけではないんですけども、でも、見守るってことはできる
かもしれません。守るとは言いません。そら、おかげを授けてあげられ
るかっていうと、そう単純じゃないんですけど。まあ見守るってこと
はできるかもしれませんね。

でも、それだけでも、御霊様は安心されるでしょうね。で、繋がりが深
くて、思い入れが強かったら、あるいはこちらが、生きてる人間がすこ
く大事に大事にしてたら、そうすると、それに呼応するよう^{こお}にして、強

く働きかけてくれるもんですから、御霊様としても、少し働ける部分も出てくるでしょうね。これは、天地に鳴り響くっていうところがありませんから、太鼓を強く叩けば強く鳴り響くようなもんで、これはあるとは思いません。

でも元々、生きてる間に徳を積んでっていう部分でなければ、そう簡単に働けるもんじゃないです。でも、お話をさせてもらうっていうことは、御霊様が安心されるんです。これが大事なことですよね。親先祖が安心するってのは、ほんとに大事なことです。

日頃は、いじやってお話をしたら、そんでいいんです。あとは、春秋しゅんきゅうの霊祭れいさいであるとか、あるいはお盆であるとか、お正月であるとか。いじ

いう、御霊様ときちんと、面と向かってね。ある意味、襟えりを正して、わざわざてまひま手間暇を作って、その出会う場所、約束の場所、誓ちかいの場所である、お広前ひろまえの御霊前ごれいぜん、祀まつられてる所であったりとか、場合によってはお墓参りであるとか、そういうところですね。しかもそのお祭りの時、決められた日、日時。そこで出会うして頂いて、ご挨拶ごあいさつとして頂く。できたら子孫たちが、ま、一人よりは二人、二人よりは三人ぐらいの方が、そら喜んで下さるでしょうね。まあ、それぞれ都合があるにしても。

奥城おくしろの、奥城おくしろっていうのは、お墓のことなんですけどね。奥城おくしろの墓前祭ほぜんまつり。お墓の前で、お仕えするお祭り。明後日あさって、尼崎教会の奥城おくしろの墓前祭ほぜんまつりが仕えられますけれども、明日は、尼崎教会のこのお広前ひろまえで、お仕えさせて頂

きます。明後日は、額田^{ぬかた}。額田ってというのは、弥生ヶ丘墓園^{やよいがおかほえん}ですね。尼崎市の額田という場所にありますが、そちらの方で、奥城墓前祭をお仕えさせて頂きます。

そういう時に、まあ今はちょっとコロナのことがあって、足を運ぶということがし辛いですけども、次の秋ぐらいにはおかげ頂けるかな、と願ってはおりますし、まあそうなるんじゃないかと思っではおるんですけど。

基本的にはこういうお祭りの時ですね。今は、足を実際に運ぶことはそう簡単じゃないにしても、お祭りのその前後で、各自でお参りをさせて頂いて、^{はごね}拝礼申し上げる。その時間になったら、今やったら、

ユーチューブ YouTubeも、ライブ配信してもらってますから、それを通して、遥拝 遙拝
させて頂く。あるいは、それも見れない人であれば、家の神様で、同じ時
間になったら、柏手を打たして頂く。そういう人も、やっぱり今でも多
いですね。その時間になったら手合わせて、柏手を打つ。今はYouTube
がありますから、それがなかった時っていうのは、皆さんそこをわけてま
したよね。ちよつと尼崎教会でお祭りが仕えられる。じゃあその時間
になったら、家で柏手を打って、拝詞 拝詞をあげてもらおう。お話は、まあ聞
けないですけどね。でもこうしてその時間を、わびわびそれに合わせて
一日をスタートさせる。それがすごく大事になるわけですよね。

場合によっては、それはきちんと服装を整えて、スーツにして、家で

と思わずに、「あ、これはお広前でお参りをさせてもらうんや」と思ってた。玄関に出て、尼崎教会の方を向いて、ご夫婦で、ネクタイ締めて、女性の方も、まあ服やらお化粧やらきちんとして。で、柏手を打つ、遥拝する。で、また戻って、家の神棚かみだなのところで拝詞をあげる。やっぱり今でも、そうされてる方、何人もいらっっしゃいますね。

このようにして、その場には、行きたくても行けない場合でも、それぞれの心で、祈りを捧たもげていく。それが、祈りは天を通じて地に現れます。また、時空を超こえるところもありますから、本来であれば、約束の場所であるこの御霊前みたまのところまで、前に馳はせ参じて、ご挨拶申し上げてこそ、ご先祖様も安心されたり、喜ばれたりね、して下さるわけです。

「この「忘れたらならい」や「いっ、その証あかしですね。これが大事なことなんです。いつも、お守りトナわってありがとうございますって言います」「って言うことよ、それだけじゃなくって、神様に対して、「どうぞ、わが家のご先祖のことを、いっ今までいっつもお守り頂いて、神様ありがとうございます。金光大神こんこうだいじん様ありがとうございます。いっからもお世話になりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます」「って、これ、神様にお礼申し上げますといかんですよね。金光大神様にお礼申し上げますといかん。そういうお祭りですね。それが天地の道理てんちということになってきます。

昨日も申し上げましたけどね、神様に対して、子孫として、「先祖がお

世話になっております」ということで、お礼を申し上げるとというのが、これがすごく大事になってきますね。お世話になってる場所ですから。何から何までお世話になっておりますから、生きている間だけ、神様のお世話になるんじゃない。死んでからも、神様のお世話になります。で、お祀りまつりされてるところであれば、守もとして、金光大神様こんこうだいじんが日々御神勤ごにちごしんきん下さって、お広前ひろまへで先祖を守って下さってる。だから、お礼を申し上げます。これもやっぱり、おんなじことですね。昔であれば、お墓のどこにも人が住んでた。墓守はかものってというのがあった。そうすると、墓守にもやっぱりご挨拶ごあいさつするっていうところが、やっぱりありましたよね。

いつもいつも自分たち、毎日毎日来れるわけでもないけど、で、お世

話できるわけではないけれど。じゃあ、その墓守の人が回りながら、台風の後やったら、いろいろ汚れたりね、木の葉が散ったりとか。「じゃあちょっときれいにしとかんといかん」とかね。地震が来て、ずれてたら、「ちょっと、少しでも戻もどしとかんといかん」とか、見回って下さったろ。

で、「この人んところは、あんまり誰たれも、人来てないなあ。かわいそうになあ」と思ったらやっぱり、特別に手厚く、できるだけさしてもらって。いろいろのが、墓守ですよね。これと同じように、このお広前でも、教徒きょうとであれば、教徒の方、あるいは皆さん、ご先祖が教徒であろうが、信徒しんとであろうが、いらっしやいますから、そのご先祖を、こちらでご祈

念^{ねん}として頂^{たま}くわけですから、そのご先祖様^{せんぞさま}のことを今度^{こんど}、このお広前^{ひろまへ}で守^{まも}りして、さして頂^{たま}く。ま、それが、広前^{ひろまへ}の守^{まも}りになるんですけれども。

こうして、ご先祖^{せんぞ}がご先祖^{せんぞ}としてお祀^{まつ}りされてるというのは、これは、ほっとって祀^{まつ}られてるわけじゃなくって、一度^{いちど}祀^{まつ}ったらそれでいいってわけじゃなくって、ずっとお世話^{せわ}して下さるご存在^{ござん}がある。目^めに見えないうち^{うち}で、神様^{かみさま}がずっと、お世話^{せわ}して下さってる。

で、目^めに見えないうち^{うち}であれば、御霊^{みたま}前^{まへ}を、まあ私^{わたくし}であれば、お洒掃^{さいそう}さして頂^{たま}いたりとか、また、御神飯^{みかみはん}様^{さま}であつたり、御神水^{みかみづ}様^{さま}であつたり、御供物^{みけもの}であつたり、そういったものを、お供^{とも}えさしてもらって、また、成^{なり}り代^{しろ}わって、ご祈念^{ごねん}をして頂^{たま}く。ご挨拶^{ごあいさつ}をして頂^{たま}く。こうして、して下さ

ってるご存在に対して、氏子うぢことしては、やっぱりお礼を申し上げるのが筋なわけですよね。

で、ここもやっぱり大事にさしてもらわんと。ま、何もこっちは、お礼言うてもらいたいとか、そんなの考えてるわけじゃないですけどねども、お世話になってる立場で考えたら、それをさしてもらうということが、道理にかなうことで、それをしないってことは、逆に道理にかなわないことなんです。やっぱりそれは、よく覚えておかんといかなあと思えますね。これも、親先祖を大切にするとということに繋がってきますね。

で、ご先祖がどうすることが喜ぶのかっていうことについて、私は五

代金光様にお取次とりつきを頂いた時があっただんですけど、そうすると、五代金光様は、

「手元を大切にすることです」

「現教主 五代金光様の御理解 八七頁ページ」

って、こう仰いましたね。

手元を大切にすること。手元ってというのは、結局、私という生きてる人間が、残された人間が、自分の手元を大切にすること。じゃ、自分の手元を大切にしたら、どないなるんか。そうすると、自分が立ち行

きますね。じゃ、自分が立ち行くということとは、これ、親先祖を大切にすることってそういうことになる。なんでか？いや、生きてる人間のことを、ご先祖も、いっつも思ってるわけですよ。御霊みたま様ね。かわいいし、気になるし、大事やし。幸せでいてほしいって思ってるわけです。だから、こちらが立ち行くということは、ご先祖様にとったら、安心なわけですよ。何よりの安心になってくる。

考えたら、神様と人間は、親と子の関係である、と。神様と神様の氏子うじこの関係だ。だから、「氏子が助からんと、神が助からん」と仰る。これとおなじことで、氏子が助からんということは、神様は助からん。親ですから。人間の繋つながりでも、生きてる私たちが立ち行かん、助か

らんってなると、親先祖も助からんってなってますね。これ、生きて
ようが生きてまいが、一緒です。やっぱり助からんってなってくる。

だから、生きてる人間が、私たちが、自分の手元を大切にしてい、神様のお
かげを身一杯に受けるといことが、これが結局、親先祖が助かるし、
親先祖に安心して頂く。これがね、親先祖を大切にすることっていうことを
仰るんです。これね、ほんとにそうです。

氏子^{うじこ}が安心すれば、神も喜ぶ。

「二代金光様のご理解 四九二」

って教えがありますが、ほんとにね、神様だけじゃないですよ。自分という人間を大切に思うて、愛して下さってるんであれば、誰でもやっぱりそらね、喜んで下さいますよ。こちらが安心のおかげを頂いているとね。

逆に、不安で一杯になると、神様だって親様だって気になるし、かわいそうにと思うし。生きた心地しないし…って、そらあるでしょうね。だから、またお働きを下さったりするわけですけども、生きてる人間は人間で、信心しておかげを受けて、早うはよご安心して頂けるようにという、これもやっぱり大事なところですね。その心がけというのが、やっぱり大事になってくる。これも親先祖を、親を大切にすること

なってくるんですね。もうこの辺はまあ、これまでお話をしてきたことに全部繋つながってきますけれども。

後はですね、大切にするといいのでも、先祖のめぐりをお取り払い頂けるような生き方をするといいことですね。

先祖、先祖よりの罪をわびよ。

一理 I 近藤藤守 こんどうふじもり 二六より抜粋

って、教祖様仰ってましたでしょ。その、先祖先祖からの罪をお詫わびするということ、先祖が積んだ罪ですけども、それをまあ、子どもが、

孫が、子孫が受ける形になっていくんですね。でも、子孫がしっかり信心して、先祖が積んだめぐりというものも、お詫びをさして頂く。成り代わってでも、お詫びをさして頂く。その罪が赦ゆるされてく形になれば、先祖もそれで、亡くなくてもお咎とがめを受ける部分があったのが、解放される。赦される。これだけでも、先祖を救うてるんですからね。

これ、ものすごい大きいですよ。生きてる人間も、その親先祖が積んだめぐりが巡めぐってますから、罪が巡めぐってるから、自分も立ち行かんといいところがある。だから自分が助かって立ち行くということと、親先祖が立ち行くってのは、全部不可分なんです。繋つながってるんです。

親先祖が助かるということによって、生きてる自分にも、関わってる

めぐりも取り払われる。だからこれも助かっていく。だからこう、ある信仰観しんこうかんにおいたら、日本にもいろんなところにあると思います。なんか悪いことがあったら、先祖の供養に行くとかね。よく聞きますでしょう。

で、ご先祖のところに行って、場合によったらですよ、信仰によたら、本当にこう、先祖を呼び出してもらって、そして話をしたりとか、その苦しみを聞いてあげたりとかすることによって、生きてる人間の苦しみ解放されていくとか。そういう世界がある。これも、あながち間違ってるとか、そんな言えないですよね。

生きてる人間と、亡くなった人間っていうのは、そんなにね、断絶だんぜつしてないんですよ。しかも、関わり合ってるんです。そこをよく理解してお

かないと、「なんで、なんで」だけで終わってしまいますよね。

計り知れんところは多々あるにしても、いよいよのいよいよは、分からんことばかりなんですけど、分からんということも、分かっとかんといかんのです。これも大事な信心なんですけれども、でも、親先祖が積んだめぐりか、自分が積んだめぐりで難儀なんぎをしてるっていうの間違ひがありませんのんで、ですんで、何をしたってことは、いよいよ分からんでも、でも、ご無礼お粗末不行き届きがあって、難儀してるということころは、これはあるんですから、やっぱり、ご先祖のことを神様によようにお詫びをさして頂く。

先祖に詫びてもしょうがないですが、詫びる先はって言うたら、神様

ですよ。神様にお詫びをさして頂く。その行為が、天地の道理にかなう。天理の抑えてんりから外して頂くことになってくる。それをせんかったら、いくら神様にお願おみいしたところで、神様でも、如何いかんともし難いですもんね。天理の抑えを受けたら、もう神様も、如何ともしようがないですもん。だから、神様にお断り申し上げていく。先祖先祖からの罪を詫びる。皆さん、されてますか？せんじあきませんよ。

「え？私、そんなしてないですよ。そんな悪いことしてないですよ。って、いやそんなもんでもないです。案外、生きてる人間が難儀なことしてるのは、先祖からしてることも全部繋がってるもんです。

かと言って、なんでもかんでも先祖のせいばかりにすんのも、どう

かと思えますけどね。だから、生きてる人間も、亡くなった人も、人間であるということは、もういろんなミスしとんですよ。知らず知らずでも、知ってもそうですけど、「ご無礼お粗末不行き届きをしてるんです。「いや、俺はしてない」って、そら傲慢ごうまんなだけでね。

教祖様のように、いや自分はもう一生懸命じゅうしゅうけんめい、そないならんように、ならんようにと思って、誰よりももう、抜かりなくやってきたつもりであっても、「ご無礼がある。「これで済んだとは思いません。神様から」「ご無礼があった」と言われ、周りの者は「いや、もうこんだけやってたんやから、ご無礼なんてあろうはずがない」っていうふうにして、ねえ。

ふるかわやおそ
古川八百蔵さんが仰いましたけど、「そんなことはない」と。「じゃあそれ

で命を、主人は命を落として、家は滅んでもいいんやな」って。もうそれだけの話ですもんね。言ってることがそうなんですよ。

その心得違いが問題なんですよ。だから七つも墓を築かされる形になるんです。その心得違いという、謙虚けんきょに生きないといけないんですよね。

その心得違いってものを直していくためにもやっぱりね、ほんとに「じつ」、自分という人間、そもそも人間というのがほんとに至らんところであるということ。それでもかわいいと思って愛して下さってね、何でもおかげ下さってるんですよ。何から何まで。生きるために必要なものね。これ、ご慈愛じあいですよ。でも、ご無礼ばかりしてしまうところがある。でも、お詫びをさしてもろうて、お赦し頂いて、少しでも改まらしてもら

う。お育てを頂く。成長していく。これが大事なことで、神様も、それを楽しみにして下さってるんですよ。

そういう意味では、先祖を大切にする、親先祖を大切にするということは、親先祖の積んだ罪、ご無礼も含めて、お詫びをさして頂いていく。そしたら、親先祖も「ああ、すまんかったなあ。いろいろご迷惑かけたなあ。でもこうして信心してくれたおかげで、あの罪を取って頂いて、ほんまに助かった。ありがとう、ありがとう」と、言うってくれる。生きてる人間も、それで助かり立ち行くようになっていく。で、それだけ、めぐりを取り払って頂けるだけの信心をするってことは、それだけの信心の徳でもって、おかげに変えてもらいますし、さらに進んだ信心すれば、め

ぐりは徳に変えて頂けますから、今度それによってね、おかげを頂けるようになってくる。

浮かばれん御霊みたまだって、御先みさきになってる御霊だって、今度は守り神になってくる。そういうことがおかげになってくるんですよね。ま、そういう意味じゃ、こちら側がしっかりと信心さしてもらうことによって、御霊様もずいぶんと居心地、御霊としての生き方と言いますかね、浮かばれ方も全然違ってくるでしょうね。ま、そういう意味じゃ、生きてる人間にしか信心できませんのんで、もう亡くなってしまったら、基本的には、自分ではどうこうできません。もう、生きてる人間に祈ってもらえないんです。

で、それもおらんかったら、御先になると言われるんですよ。もう、
祀りまつ手がないということ。尼崎教会でもおられます。だから、そういう
場合は、尼崎教会が持齋もちさいくということ、私わたしが、今であれば、広前ひろまえの守もり
として、預まかからして頂いて、祈いのらして頂いてってなりますよね。

でも、できるだけは、生きてる人間でしっかりと信心しんさして頂きたい
もんやなと思います。

あともう一個言わしてもらおうとね、まあこれは、親先祖の話だけでは
ないんですけども、親の言う通りにするのが、何も正しいというわけ
でもないんです。例えば、八百蔵やおぞうさんが言ったこと、「これはもう、間違

いなんてありません」と。じゃあ、これ、正しかったですか？間違ってますね。そうなんです。親って言ってもね、間違えるんですよ、これ。じゃ、親が道から逸れててね、ま、実際にありますよ。生まれた時も、大きくなってからでもとにかくね、自分の子どもに、「万引きせい、万引きせい」「って、万引きの仕方を教えるなんてありますよ、今でも。

で、中学生くらいになった、女の子やったら、風俗で働かせるとか。それが悪い云々（うんぬん）じゃない。自分の意思で行かしてもらおう言ったら、それも一つの選択の自由かもしれない。でも、そういうところで働きたくない、それでももう、中学生くらいでも水商売させたり。いっぱいありますよ。そういうのんで苦しんできたという（うい）氏子を、いっぱいお取次してきまし

だから、やっぱりいますよ、普通にね。

じゃこう、親の言う通り、親の喜ぶこと、「わしはこれで喜ぶんや」「って、「だからしといで」「お母ちゃんこれで喜ぶんやから、盗んどいで。「じゃあこれ、親孝行か？違うんですよ。これ、違いますわね。親は喜ぶというところが、何もそのまんま、神様が喜ぶこと、というわけじゃないんですよ。これは全然違うんですよね。

場合によったら、親と正反対のこと。親がやってることは間違い、自分はこのことはしたくないというので、親が、「あんた、誰に育ててもらったんや。こうしいや、ああしいや」「この恩知らず！」「って言っても、親がやってることが間違ってる、自分はそうはしたくない

と思ったら、そこから離れて、で、正しいことを、自分は親とは違
と、場合によったら、まあ俗に言ったら、反面教師みたいな形でもね、正
しく生きようとしていこう、と。できるだけ、嘘、偽りがないように生
きさせてもらおう。実意丁寧じついせいねいに生きさせてもらおう。それをお稽古けいこして、
おかげを頂いた。

でもそら、親にとったら、「あの恩知らずめ」って言うかもしれませ
でも、そのまんまで一生終わったとしてもですよ、じゃあ生きてる間は、
まあ傍はたから見たら、親不孝してるわって、見えるかもしれませ
けども、実際に信心さして頂いて、そうすると、親のめぐりを自分のと
こで食い止めてあげたとしたら、これ、最大の親孝行になってくるんで

す。ま、そういうご理解ありますね。二代様のみ教えでもね、

生みの親に不孝をして、天地の親に孝行をしてのち、天地の親よりほうびをもらって、末で生みの親に孝行をしている子がある。

一二代金光様のご理解 三七三

これなんて、そういうことですよ。親が生きてる間は、親の我情がじょうがよく我欲がよくがありますから。親の物差しが間違ってますから。じゃあそうしたら、

「お前は親不孝もんや。わしの言うこと聞けへんやないか」言うて、言

われるかもしれない。でも、死んだらまあ、そういうしょうもないことも忘れてしまう。じゃあこちらが、生きてる人間が正しく信心させてもろうたら、そうすることによって、親先祖が浮かばれていくということがある。

何より、悪いものを自分のとこで食い止めて、これだけでも大きいことですよ。これだけでも、親は救われていくんです。生きてる間は分かってなくてもね。こういうことも、やっぱりありますね。そう思ったら、親が何も正しいわけじゃないし、親が喜ぶことがすなわち、それが親を大切にするなんて、そう単純でもない。じゃあ、どうしたらええんか。つまり、「親の言ひ通り」「いじょうは、いよいよのところ、親神様の

言う通りにしてたらいんです。そしたら間違いはないですね。神様ですからね。

教祖様は、

神はわが本体の親ぞ。信心は親に孝行するも同じこと。

一理Ⅲ 神訓 一―五―

と、こつ残しておられますね。「神はわが本体の親ぞ。信心は親に孝行するも同じこと」「こつねも有名なこ理解ですけど。

神様っていうのは人間の親様ですね。命の授けの親様ですし、また育

ての親でも、ほんとはあるんでしようけどね。命を育てて下さってま
すしね。死んでから、御霊みたまになっても親やし、まあ、ずーっともう、ほん
とに親です。一生死なぬ父母ですよ、仰る通り。

その親様は、どうすることが正しいかって、みなご存じですから、天地てんち
の道理しうりというのがあるって、それを知って、それを分かって、了解して、信
心しんしてもらおう。そうすると、神様のおかげを身一杯に受けられますで
しょ。そうすると、自分も助かる。で、親先祖も、子や孫も立ち行く。周
りも助かる。真まの信心したら、いとこの端までおかげを頂く。それどこ
ろじゃない。一人がよい信心したら、千人も万人もおかげを頂いていく
…ってなってくる。このように、生きてる人間が、正しい生き方を身に

つけていくと、それだけで、親先祖も含めて、みんなを大切にすることになってくるんです。

そのために、親神様を大事にするということ。つまりそれ、信心するってことでしょう。これをするとおかげになる。でも信心も、神様拝む言ったら、身勝手な信心になったらこれ、おかげ頂けん。こら教祖様の時代からそうでしたからね。話を聞いて、助かる神様である。そこが大事なわけで。でないと、自分自身が改まるといことがないわけですから。

だから、そのためにお取次とりのつぎを頂く。金光大神様こうこうだいじんを差し向けて下さって
る。その金光大神様の御取次おんとりつぎ、み教えを頂いて、そして自分の生き方とい

うものを見つめて、時に改めて、天地の道理に沿った神様の道を踏む生き方。どうすれば助かるのか、どうすれば幸せになっていけるのかという、その筋道。それを教えて頂いて、それをお稽古けいこしていく。わが身わが一家を練習帳にして、お稽古していく。それが信心ですね。

その信心のお稽古をさしてもらった分、おかげが頂ける。その通りになっていく。正しい生き方ができてくる。これでめづりが取り払われていく。つまり、罪が消されていく。消えていく。赦されてくる。だから先祖も助かる。子孫も立ち行く。自分たち、いとこの端まで。見ず知らずの人でも。

私、ここで座ってて、ま、ほとんどの人、基本的には見ず知らずいたら

見ず知らずのところですよ、本来であればね。でも、教祖様でもそうです。教祖様がよい信心したら、多くの方が助かるように、私は私です。でも、私がよい信心するようになったら、一人でも二人でも、助かる人が増えてくる。

自分だけのことで言ったら、「もうこれでええわ」と思っても、まあいいんですけど。でもやっぱり、神様に助けて頂いて、少しでもご恩返しさせてもらわんと相済あひすまん。また、苦しんでる人がいたらかわいそうやな。その、かわいそうやから、ですよ。

かわいそうな人が助かったら、そら嬉しいですけど、普通にね。「ああ、よかったな」と思いますよ。でも、人を助けるってのもなかなか大変で

す。けれども、それでしか助からん。で、自分もそれで、実は神様から取り次いでもらって、私は基本的に、神様から直接がほとんどでしたけど。

でも、こうして教えて頂くことによって、助けて頂くという点にはおんなじですから、自分のところで食い止めるっていうことはなくって、多くの人にこれを、信心を伝えていく。お話をしていく。それを聞いて、「なるほど」と、合点がてんがたって、信心する人が一人でも二人でも増えていけば、これだけでも神様のお喜びになりますね。その人も助かるでしょう。これが、何より親孝行になる。親神様の孝行になるし、自分の親先祖も含めて孝行になるし。で、自分も助かり、神様も助かった。それ、たましいの親様、つまり金光大神様…親先生ですね、も、喜ばれる。こう

いじょうじになってゐる。

こういうところを、大事にせんとあきませぬね。これを意識しながら信心していく。これ今、れいさい靈祭を前にしてお話してるんです。今言うたことを、信心を、日頃からしてらへようじや。これが、みたま御霊様のお喜びになるということなんですね。

靈祭だけ来て、そんでご挨拶あいさつしたらそれでいいっていう、そういうわけじゃないです。つねひし常日頃も大事なんです。生きてる人間でもそうですもんね。親子関係とつてもそやし。常日頃が大事ですよ。

それでいながら、やっぱり折節せつしっていうのも、これも大事ですよ。親

子関係って、仲良し、仲良しって言うことでもね。でも、子どもにとつたら例えば、自分の誕生日を親から忘れられとつたら、「えっ」って思うかもしれないよ。すっかり忘れて、何日も何日も経ってから、「あ、そういえば君、誕生日やったなあ」って言われたらね、「えっ」って思うかもしれない。

まあその日をただ忘れてるっていうだけじゃない。自分が生まれたということ、自分が生きてるということ。それに対して、どれだけ喜ばれてるんか。大事に思ってくれてるんか。それを神様に感謝してくれてるんか、ということに繋がるつながるからなんですよね。だから大事なんです。

実は、誕生日という日が大事というよりも、日の問題じゃないんです

よね。これ自分が生まれてきたことやら、自分が生きていくことやら、その喜び心をちゃんと持ってるかどうかって、その確認になるんですよ。

そろそろですよね。和太先生かずた（尼崎教会初代）が亡くなったお日柄、七月の二十六日。まあ別に、いつ死んでもいいっちゃいいんじゃないですか？「生きてる間だけ」って、教祖様でも仰ってますけど、生まれる時も、死んだ時も、別に何にも言わずに、好き勝手な時に生まれて死んでいく。生きてる間だけ、その日その日と言っければ、って言われる。これもそろですよ。

でも、その日をなぜ大事にするかって言ったら、喜びやら感謝やらを、

ちゃんと伝えれる、その日として定めて、その日はそれを現していくというところが、こちらとしての思いを相手に伝える、愛情を伝える、気持ちを伝える、その一つの現れになってくるんですよね。だからお祭り日ってというのは、大事になってくるんですけど。そう、記念の日ですよ。形見の日ですよね。

お祭りの日でもそうだし。お誕生日でもそうでしょうし。亡くなった日でもそうでしょうし。人によったら、結婚した日であったりとかね。その日というのが、「命を頂いて、よくぞここ^こまで来^こさせて頂いたなあ、これが大きな意味があるんですよねえ。

日も大事やし、でも日々^{ひび}も大事やし。特別な日も大事やけれども、日々

も大事。で、家ん中でも、どいかに居ても、心がけながら、お話す。これも大事。

でも、改まって、お広前ひろまへ参らしてもらって、霊祭の日にはね、きちんと足を運ばしてもらおう。墓前祭ぼぜんさいにもお参りをさしてもらおう。これも大事。ハしも大事やし、ケも大事なんです。どっちも大事なんです。ハしばかりも、まあそうもいかんですし、ケばかりでもいかん。どっちも大事ですよ。これが人間にとって、すごく、ものすごく大事なんです。神様との関わりでも、人間同士の関わりでも。御霊様との関わりでも。命あるもの、物とも、本当はそうなんでしょ。うね。

こうして神様を大事にする。物を大事にする。自分を大事にする。人

を大切に。先祖を大切に。全部繋がってきます。これ要約すると、信心するということですよ。信心して、そして、わが身におかけを頂いていく。親先祖も立ち行く。神様にもご安心して頂く。まあ何よりですよ。

で、結局のところ、どうしたらええねんって言ったら、信心したらいいってことで、もうぜんぶ、一言で言うたら、まとまっちゃうんですよ。ま、実際そうですよね。

これほんとに、大事なことやなあと思います。まあどうぞ、それぞれにご先祖が、皆ありますから、生きてるってことはもう、命は繋がってるわけで。どんな先祖か言うて、そら徳のある先祖もおればね、なかなか

か難儀なんぎな先祖もおるでしょう。誰だれだってそうやと思います。

でもそれぞれ、神様のご縁のまにまに、先祖も選べるわけじゃないし。

先祖を選べないし、子孫も選べないでしょうね。先祖にとってもね。

でも今、私わたくしたち、こうしてお話聞きいてるお互たがいは、信心に出会わして

頂いただいてますでしょ。これ大きいですよねえ、ほんとにね。何より大きい

やないですか。だって、どうしたら正しいこと、自分も先祖も助かるか

って、もう教えて、答え教えてくれてはんねんもんね。

これ、分からずに一生懸命じしゅけんめいつてのも、いわ当あたりずうぼいど難なんいこと。

ま、そやけど、教えてもろつた。で、「どうしたらいい」って、的まてがあん

のやったら、これやりやすいですよね。じゃ、それに向かっむかってお稽古けいこし

そういう気になりますしね。訳分からずに、ピアノ弾いて、覚えて、ピアノだけ置かれても、なんも弾かれへんわ。せやけど、教えてくれる先生も置いてくれはって、こら助かるわ。必要な教材も、用意してくれはって。弾き方も教えてくれはったらなあ。こらやりやすいで。おんなじやね。

どうぞ、まあそれぞれに、明日の御霊様みたまのお祭りをお迎えするにあたって、今日から良い準備をさして頂きたいですね。ほんとにお参りは、なかなかこう、その時間帯にお広前ひろまえでお祭りをお仕えることはできませんけれども、でも、できるだけの実意丁寧じついついごねんごでもって、家で遥拝ちやうはいされるよ

うにして頂けたら思います。もう、良い準備をしてね。良い準備をして、ご先祖様にご挨拶あいさつさして頂いたら、ちゃんとお届けしますから、ね。喜んで頂けるように。

まあ何もね、一いち張ちやう羅らやって、別にタキシード着ろとか言いませんけどね。せやけど、できるだけきれいな格好して、きちんとして、正して、歯みがあ磨みがいて、顔洗って、「ああ、神様に、御霊様にご挨拶さして頂こう」「言うて、「ああ、いつもありがとうございます」。で、だいぶ年齢重ねたら、もうお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんも亡くなってらっしゃるって方も、たくさんおられますよね。「ああ、おかげでこうして、おかげ頂いて、自分の命を繋つないで頂いて、こうして元気にやらして

もらっています。「って。「うしもありがとうございます。育てて下さってありがとうございます。」「言いつて、ご挨拶さしてもよろうて。それだけでも、喜ばれますよね。で、「子や孫がほら、こう来ております」「言いつて。「元気に過ごさして頂いております」「言いつて。言ったら、「ああ、よかった、よかった」「って。で、教徒かきうであれば、「いっして、信心しんしん繋がっています」「言いつて。言ったらそれまた、「ああよかった、よかった」「言いつて、喜んで下さるでしようね。

こうして神様に、ご先祖様に喜んで頂けるように、そういう信心を、今日明日でまた、改めてね、この日をお迎えするにあたって、心して過

ごさして頂きたいものやなあと思いますね。明日の霊祭れいさいと明後日あさっての墓前祭ほほんのみいは、ほんとにね、大事ですから、御霊様みたまの祖霊大祭それいたいさいと言ったところもありますね。御霊様の御大祭ごたいさいというような言い方をされるお教会もあるくらいですけども、どうぞ麗しなむしくお仕えされるように、願わして頂きます。どうぞそれぞれに、おかげを頂いて下さい。

よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第七八話

令和三年三月十九日 朝の教話

令和四五年月二七日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
